

## クリスマスによせて

飼い葉桶に寝かせた

ルカ二・六〇七

クリスマスはこの時期、街にでるとキラキラ、とてもきれいですね。普通のお宅で息を呑むようなイルミネーションを飾るところも増えて来ました。そんな華やかな世界から戻つてくると一番地味な場所が教会だった、なんてことも珍しくありません。なにか、とても不思議な感じ。クリスマスって教会のお祭りではなかったの？

そんなとき、あらためて聖書で語られるクリスマスの出来事に耳を澄ませたいと思います。

二〇〇〇年前の夜、赤ちゃんイエスさまはどこにお生まれになったの？ 立派な宮殿？ そびえたつお城の中？ 贅をつくした裕福な家？ どれもちがいます。「マリアは月が満ちて、初めの子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせ

た。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである（二六、七節）

お生まれになったのは牛やロバを飼う家畜小屋。暖炉も明かりもなかったでしょう。夜風のふきすさぶ寒い地面におかれた、ワラをいれる桶がイエスさまの最初のベッドでした。泥にまみれ、ひび割れし、壊れかかった飼い葉桶。世の人々に知られることも、祝われることもなく。しかし、天使に示されて、たどり着いた貧しい羊飼いたちの心の目に、その飼い葉桶はきつと静かであたたかな光をたたえていたことでしょう。神さまの贈り物がそこに眠っていると彼らは知っていたから。

クリスマス光、それは飼い葉桶に灯る光。私たちの心もこの世の厳しい風を受けて寒さに震え、傷ついて壊れかけた飼い葉桶。でもそこに、神さまは独り子イエスさまを横たえてくださいます。クリスマス光として。